

幼いころ親に読み聞かせてもらった本は、人格形成に少なからず影響する。

日本学術会議会長で宮内庁皇室医務主管の金澤一郎さんが60年以上前に親しんだ『わし姫物語』を思い出したのは3年前。有識者16人による「こころを育む総合フォーラム」の席上、読書が議題になった時だ。

いたずら好きな王女キルディーンは両親に甘やかされてわがままな子に育ち、国の外れの高い塔に置き去りにされた。厳しい目をした驚たちのもとで、感謝する心や礼節を少しずつ身につけていく。フランスの画家が描いた精密で美しい挿絵も、金澤少年の心に深く刻み込まれた。

「主人公を囲んで立つ驚たちの姿など、とても印象的だった。紙は粗末だし絵も白黒でしたが、深みのある物語に何か大

## 幼き日の物語 奇跡の新訳

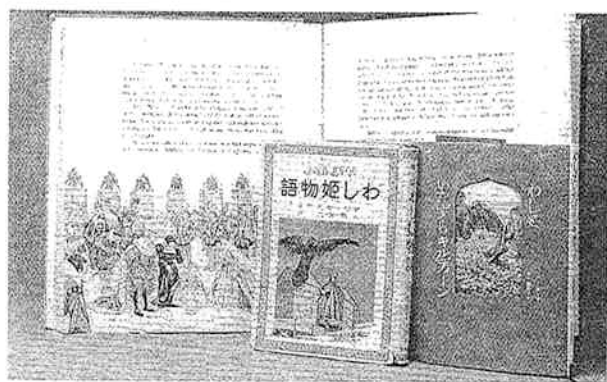
切なものを学んだように思います」

原作者は、19世紀末に英王室からルーマニア王家に嫁いだマリー女王。1942年に日本で出版された本を訳したのは精神分析学者の故・大槻憲二氏だった。金澤さんは今の子供にも読ませたいと思ったが、本はとつくと絶版。一昨年、国際子ども図書館でようやく見つけ、復刻できないかと大槻氏の縁故者を探した。難航の末、インターネット検索で「私の祖父、大槻憲二」の一節に出合う。

その孫娘、長井那智子さんはイギリス経験が長く、英文学に詳しいエッセイスト。金澤さんの相談を受けて、自ら新訳を引き受けようと決意した。原作は容易に見つからなかったが、ロンドン在住の友人に協力を求めたところ、古書店で1922年発行の希少な初版本が奇跡的に発見された。

こうして今夏、読みやすい文章にカラーの挿絵も多い『わしといたずらキルディーン』(春風社)が出版された。長井さんは八手元に届いた布張りの大型本を開いた時、不思議な感動が私を包みました。と、あとがきに記す。祖父の励ましが聞こえるようで、縁といつことを思ったという。

書物の「生命力」を象徴するような出来事である。



『わし姫物語』旧版(手前左)と、長井さん訳の『わしといたずらキルディーン』(同右)。奥は原作初版本

(永井一頭)